



1975年柏崎市安田生まれ。
高柳町内で妻と4歳の息子との
3人暮らし。高柳移住歴9年。

非農家の家庭で育ち、大学で建
築を学ぶ。新潟市で住宅や店舗
の設計・監理業務に従事し2010
年に帰郷。生態系保全NPOス
タッフなどを経て2012年より高
柳町内にて農に関わる。

米・小麦・そば・大豆の生産販
売と小麦等の自家製粉も行う。
農業外では道路除雪のオペレー
ターや様々な地域活動に参加。

自己紹介



農との出会い

帰郷後、暮らし方を考えていた私は2012年に柏崎市の事業の一環で様々な市内農家さんの手伝いをさせもらう中で、高柳町門出ではイノシシの電気柵設置や鈴木さんの耕作放棄地の整備の手伝いをさせてもらい、この風土・景観の中での暮らしに興味を持ちました。

高柳で美しい風景の中に浸りながら暮らすには、農と関わることが一番の方法。
鈴木さんから農を含めた山の暮らしを教わりながら、高柳で暮らすことにしました。



2015年から0.4haの借りた田んぼで新規就農者として自営農をスタート。
現在は水稲2.8ha、耕作放棄からの転換畑地2.5haまで広がり、高柳地域での自分の認知も進んできました。
高柳の仲間と始めた「べとプロピザ部」の活動では高柳の小麦や食材を使って柏崎や十日町のイベントに出店しながら新しい仲間増やしに役立てています。

自身の農業について



高柳の現状

- ・ 農業従事者の高齢化で離農者が増え、機械化が進んでも山中の農道・水路整備や防除の共同作業が難しくなっている。
- ・ 地形の影響で無人ヘリ防除ができる範囲は限られる。薬液タンクとエンジン噴霧器を搭載した軽トラックと4、5人の作業員で移動しながらの共同地上防除や個人による防除が耕作者の負担に。
- ・ 水場の遠い圃場では薬液の補充にも時間をとられ、効率が良くない。

農業用ドローン導入の経緯



高柳農業振興会による新しい担い手を支援する事業

- ・ 様々な免許の取得への助成
- ・ 農業用ドローンの購入
- ・ 2名のドローンオペレーター資格取得
- ・ 農業未経験者対象の農業インターンシップ制度創設

農業用ドローン導入の経緯



<2021年よりドローン導入>
タンク容量10リットルで農業
散布用ドローンとしては小型の
機種。
散布幅は4mですが、中山間地
においては容量よりも変化のある
地形で小回りの利く機種として
選定。
オペレーターとナビゲーター2
名で運用、薬液補充やバッテ
リー交換の時間を含めて1ha散布
にかかる時間は20分ほどで完
了します。

ドローン導入の効果



今年度は試験運用で、
水稲4.5ha
小麦のべ2ha
大豆2ha
の防除に活用しました。

実際、ほ場間近の樹木等の障害
物のために薬液が届きにくい箇
所もありましたが、病害、薬
害共に出ることもなく、一定の
効果があると考えています。

近年、認証農業もどんどん増え
ているので、活用の幅が広がり
ます。

ドローン導入の効果



耕作者の減少が止まらない現状で、耕作できない場所はますます増えていきます。
現状の課題を解決する可能性として新しい技術を活用することが必要だと考えています。

将来への希望・まとめ



- 「スマート農業」発展の期待
 - ・山間地でも使える自律自走型の地上ドローン
 - ・不整形地でも使える自動走行トラクターなど

が新しい技術で開発され、活用できれば、希望が持てる。

- 人材の確保・育成
 - 先人の知恵に敬意を持ち、新しい技術を興味を持って活用できる人材の確保

- 新技術導入のコスト
 - 平野部と山間地で作期の差を
使える作目での機械や施設の
共同利用システムが欲しい

将来への希望・まとめ



■中山間地の農村維持は住み続けながら行っていくことが必要

■距離に関係なく、世界中と繋がることができる時代に、農村の担い手が持続的暮らすため、交通インフラや教育システムなどの子育て環境、生活にまつわる多方面の行政サービスにおいても新しい通信技術などをいち早く活用して持続可能な農村づくりが必要

将来への希望・まとめ